

中国語を母語とする日本語学習者の受身文の誤用分析 — 作文コーパスをデータとして —

王 辰寧

0. はじめに

日本語の受身文には、直接受身文、間接受身文、持ち主の受身文など、複数のタイプがあり、また、主語が有情物(人)になるケースと非情物(無生物)になるケースがあるなど、多様な形式が存在する。このような日本語の受身文を、日本語学習者が産出する際には、様々なパターンの誤用が生じることが予測される。

これまで受身文の習得を扱った研究は多数あるが、中国語を母語とする日本語学習者の受身文の誤用に関する研究は未だ十分に行なわれていないと言いがたい。そこで、本稿では、『YUKタグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス2015』Ver. 5を用いて、中国語を母語とする日本語学習者の受身文の誤用を調査・分析し、誤用の数、そのパターンおよび誤用の原因の3点を明らかにしていく。

1. 先行研究のまとめと本研究の立場

1.1 受身文の意味分類

日本語記述文法研究会(2009:210)によると、ヴォイスの中心的な表現の一つである受身文とは、「動詞の語幹に「-(r)are-ru」という接辞を付加することによって、働きかけや作用、関係のあり方を受ける存在をガ格名詞として表現するものである」とされる。

受身文が表している意味に関しては、これまで多数の研究がなされてきた。例えば、益岡(1987)は、受動文には、受影性の前景化と属性叙述の明示化により生じる「昇格受動文」(二格受動文、例:太郎が友人にばかにされた)と、動作主の背景化により生じる「降格受動文」(非二格受動文、例:その寺は、9世紀前半に建てられた)があるとする。さらに、「昇格受動文」は「受影受動文」と「属性叙述受動文」に分けられている。「太郎が友人に妻をばかにされた」、「その寺は翌年信長に焼き払われた」のような「受影受動文」は、「或る存在が或る出来事の結果として心理的或いは物理的影響を被る」という意味を明示するのに対し、「この雑誌は、10代の若者によく読まれている」のような「属性叙述受動文」は「或る対象が或る属性を有している」という意味を明示するとされる(同:183-193)。

影山(2006)は、有情物(人間名詞)を主語に取る二受身文を「行為受影受身文」(例:子供が犬に噛まれた)と「出来事受影受身文」(例:私は雨に降られた)とに分けている。さらに、非情物(無生物名詞)を主語に取る二格受身文を「状態変化受身」(例:隣の家が突風に屋根を吹き飛ばされた)、「所有変化受身」(例:金メダルが優勝者に贈られた)、「性質変化受身」(例:山頂は新雪に覆われた)、「状

態性受身」(例:DHAは青魚に多く含まれている)に分けている。

本稿では、受身文における誤用の起こり方を検討するために、受身文の分類を行うが(1.3節)、基本的には、益岡(1987)の受身文の意味分類法を参考にし、さらに、非情物を主語に取る二格受身文に関しては、主に影山(2006)の分類で補うこととする。

1.2 受身文の習得・誤用に関する先行研究

馮(1993)は、日本語の受動文(受身文)の学習を「受身マーカー学習」(「に」「から」「で」「によって」のうち、どれが特定の受動文に適切であるかの学習)と「構文文法学習」(どのような文法構造を持つ受動文が自然であるかの学習)に分け、質問紙調査(選択課題)を通して、中国語母語話者の日本語受身文の習得を困難にする要因を探っている。その結果、受身マーカーの学習エラーは学習年数(学習歴)と共に減少していくが、受身構文文法の学習エラーは学習年数と共に減少しないことが明らかになっている。また、日本語と中国語の相違点が、中国語を母語とする日本語学習者の受動文の問題点となっており、受身構文文法の学習エラーの減少しにくい原因の一つが母語の干渉(負の転移)にあることが指摘されている。

市川(1997)は、初級・中級前半程度の外国人日本語学習者(アメリカ、フランス、中国、韓国、タイなど)の作文、会話などにおける誤用を分析している。受身文の誤用例としては、述語動詞の形態の誤り、受身形と自他動詞や使役形の混同、助詞の誤用、「迷惑受身」の誤用が見られる(同:162-165)。また、挙げられている誤用例を詳しく見ると、中国語を母語とする日本語学習者の誤用は特に、受身形と自他動詞の混同、すなわち、自動詞か他動詞の代わりに、受身形にしなくてもいいところで受身形を使ってしまう誤用が多いことが分かる。これは、受身形、自動詞、他動詞の三者の関係が、中国語を母語とする日本語学習者にとって難しいことを表している。

王忻(2008)は、中国人日本語学習者(日本語を専攻とする大学3、4年生、日本語専修学校上級コースの学生)の、作文における誤用を分析した研究であり、受身の誤用は、ヴォイス(使役、受身、自発、やりもらい)の誤用分析の節で扱われている。ヴォイスの誤用は、「過剰」(ヴォイス形式を使う必要がないのに使ってしまうケース)、「不足」(ヴォイス形式を使うべきなのに使わないケース)、「文の部分間の関係の混乱」(文の主語あるいは補語などの間の表現で混乱しているケース)、「混同」(ヴォイスの間での混同)という四つのケースにまとめられている。受身の誤用は、すべてのケースに見られており、「不足」が一番目立つ。また、「過剰」の誤用の原因として、中国語では自動詞の受身が許されるというような、学習者の母語と日本語の異なる点により生じる母語の干渉が挙げられている。

望月(2009)は、中国語を母語とする日本語学習者(在日留学生、上級レベル以上)による日本語作文コーパスをデータとして、中国語との対照の視点から、ヴォイス(動詞の自他、使役、受身、可能)の誤用分析を行っている。そのうち、受身の誤用に関しては、受動形式の脱落(使うべきなのに使わない)による誤用が顕著であると指摘している。誤用の原因は、中国語では「意味上の受身文」が許されるというような、学習者の母語と日本語の異なる点により生じる母語の干渉にあるとされる。

以上のような従来の研究を見ると、中国語を母語とする日本語学習者の受身文の誤用は、学習者の母語(中国語)と日本語の異なる点で生じる母語の干渉か、目標言語である日本語の構造そのものの理解が困難である(例えば、受身形、自動詞、他動詞の三者の関係がよくわからない)ことによって、

起こるとされていることが分かる。さらに、受身文の誤用のパターンとして、特に、受身形を使うべきなのに使わない誤用と、受身形にしなくてもいいところで受身形を使ってしまう誤用が目立つことも分かる。

また、研究方法としては、従来の研究は、馮 (1993) のように質問紙調査を利用するか、市川 (1997)、王忻 (2008)、望月 (2009) のように作文などの産出データを利用している。後者のようなデータは、学習者の中間言語を反映しているデータと考えられるが、学習者の学習歴が限られている、あるいはデータの規模がそれほど大きくないといった欠点が存在している。

そこで、本稿では、幅広い学習者の多様な作文データを材料として、中国語を母語とする日本語学習者の受身文の誤用を体系的に分析することで、誤用のパターンを再確認するとともに、受身文の意味と誤用との関係についても見ていく。

1.3 本研究の目的と方法

本稿では、『YUKタグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス2015』Ver. 5を用いて、中国語を母語とする日本語学習者の受身文の誤用を調査・分析し、以下の3点を明らかにすることを目的とする。

- 1) 受身文の誤用はどれくらい起こるのか。
- 2) 具体的にどのようなパターンで受身文の誤用が起こるのか。
- 3) 受身文の誤用の原因は何か。

分析にあたり、従来の受身文の意味分類を踏まえて、次の〈表1〉のような受身文の意味分類を設定した。

〈表1〉受身文の意味分類

受身文の意味分類	例文 ¹⁾
①不利益・被害 (直接物理・心理的受影)	●彼女はその男に殺された。 ●僕は子供のとき、よく親父に叱られていた。
②受益・恩恵 (直接物理・心理的受影)	●わたしはお父さんに育てられました。 ●お母さんにほめられた。 ●先生の講義を聴き、魅了される。
③単純動作描写 (直接物理・心理的受影)	●暗闇の中を彼にかかえられて歩いた。 ●花子は、太郎から言われたように、十時に、駅の改札口に行った。
④迷惑 (間接物理・心理的受影)	●雨に降られた。 ●おれを御覧よ。母親には死なれるし、子供もいない。
⑤物理的状態変化 (直接物理的受影)	●人参がみんなに踏みつぶされてしまった。 ●自然は、砲撃によって、また破壊されていた。
⑥創作・創造	●この地理書はイタリア人の耶蘇会士によって書かれた。 ●一五八五年に、この塔が建てられた。
⑦所有の変化	●私の手にお金が渡された。
⑧状態・様態描写	●彼の論考が、創刊号に発表された。 ●今年九月に北京で開催されたシンポジウムも盛況をきわめた。 ●柄地が竹の皮の斑様によって作られている。

〈表1〉のうち、①～④は主語（被動作主）が有情物の受身文であり、⑤～⑧は主語（被動作主）が非情物の受身文である。

以下ではこの意味分類に従い、受身文の誤用の分析を進める。なお、本稿では、受身文における誤用のうち、「(ラ)レル」の使用に関わる誤用（述部の誤用）を中心に調査・分析する。受身文における誤用には、格助詞に関わる誤用（格助詞の誤用、格助詞と述部の両方の誤用）も見られるが、その分析は別稿に譲る²⁾。

2. 中国語を母語とする日本語学習者の受身文の誤用調査

2.1 調査データ

本調査に用いたデータ、『YUKタグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス2015』Ver. 5は、中国の40校の大学から収集した、日本語を専攻とする日本語学習者（学習歴：3ヶ月～10年）の作文データ（日本語教育に携わっている日本語母語話者により、添削、正誤タグおよび研究タグ付与済み）である。文体は、感想文、卒業論文、修士論文などにわたって多種多様であり、テーマも言語学から文学、文化、経済など、幅広い。データの総量は、ファイル数：2,155、文字数：3,664,073、タグ数：54,828となっている。

2.2 調査の手順

調査の手順は、下記の通りである。

- ① コーパスから受身文の誤用例を検索し、調査対象とする「(ラ)レル」の例を手作業で抽出する（「(ラ)レル」と「ニ」「ヲ」のような格助詞の両方の誤用を含む文は、今回は対象から除外した）。
- ② 各誤用例に付与されている、「(ラ)レル」の誤用箇所以外のタグを削除する。分析の便宜上、「(ラ)レル」に関わる誤用以外の誤用箇所は、正用タグに従って、修正する³⁾。「(ラ)レル」の誤用をそれぞれ1例ずつとして分析できるようにするため、一文に「(ラ)レル」の誤用箇所が二つ以上ある場合、一箇所だけを残して、複数の例文に分割する。
- ③ 作文コーパスの各種タグに加えて、動詞、動詞の自他、誤用のパターン、被動作主および動作主の意味的類型、受身文の意味分類などの情報を付与する。これにより作成した例文集を分析する。

3. 調査結果と考察

3.1 全体的な誤用の傾向

調査の結果、作文コーパスにおける受身文の「(ラ)レル」の誤用には、「過剰」、「欠如」、「混同」、「その他」という四つのパターン⁴⁾があることが明らかになった。具体的には、〈表2〉のようになる。

〈表2〉受身文の誤用のパターン

誤用のパターン		定義	誤用例 ⁵⁾
欠如		受身の「(ラ)レル」を使用すべきなのに使用していない。	作文 (009) / 学習歴 1 年 3 ヶ月 : 子供は生まれた時から両親に〈育てた→育てられた〉ほうがいいです。
過剰		受身の「(ラ)レル」を使用する必要がないのに使用している。	8 級試験 (0108) / ϕ : その人のやさしさに〈感動された→感動した〉私は「世の中、やはりいい人が多いな」と思った。
混同		受身の「(ラ)レル」と他のヴォイスとを混同している。	感想文 (0127) / 学習歴 4 年 : 女性にとって、家庭と仕事を両立〈される→させる〉のは難しい。
その他	元の動詞の誤り	受身文は作れているが、動詞の選択を間違えている。	卒論 (0014) / 学習歴 3 年半 : 漢字が中国から日本に〈伝われる→伝えられる〉前「おに」の発音は既に日本人々に使用されていた。
	述部の形態の誤り	述部で使われている元の動詞に問題はないが、受身の「(ラ)レル」の形態を間違えている。	作文 (016) / 学習歴 1 年半 : 北京の大気汚染問題は世界で注目〈しられた→されている〉。
	品詞の誤り	動詞ではない語で受身文を作っている。	8 級試験 (0132) / ϕ : 多くの地方に旅行して、見聞を書いたり自分の人生を〈豊れる→豊かにする〉。

四つのパターンのうち、「欠如」、「過剰」、「混同」は、受身の助動詞「(ラ)レル」の有無、他のヴォイスとの混同に関わる誤用であり、助動詞「(ラ)レル」に加えて元の動詞が修正されている場合も含む。「その他」は述部の形そのものが適切ではない誤用である。これらのパターン別の誤用例の分布は、〈表3〉の通りである。

〈表3〉誤用例の分類：誤用のパターン

誤用のパターン	誤用例数	
欠如	379	45.3%
過剰	381	45.5%
混同	69	8.2%
その他	8	1.0%
合計：	837	100%

〈表3〉から、受身文の「(ラ)レル」の四つの誤用のパターンのうち、「過剰」、「欠如」のパターンで誤用が起りやすく、次に「混同」、「その他」という順になっていることが分かる。

さらに、先の〈表1〉(1.3節)に示した受身文の意味分類と、被動作主(受身文の主語)・動作主の有情・非情の別に誤用例の分布を見ると、次の〈表4〉の通りである。

〈表4〉誤用例の分類：受身文の意味

受身文の意味分類	被動作主	動作主	誤用例数		
不利益・被害	有情	有情	26	39	4.7%
	有情	非情	13		
受益・恩恵	有情	有情	25	51	6.1%
	有情	非情	26		
単純動作描写	有情	有情	67	76	9.1%
	有情	非情	9		
迷惑	有情	有情	1	1	0.1%
物理的状态変化	非情	有情	4	6	0.7%
	非情	非情	2		
創作・創造	非情	有情	20	20	2.4%
所有の変化	—	—	0	0	0.0%
状態・様態描写	非情	有情	578	644	76.9%
	非情	非情	66		
合計：			837		100%

以上から、中国語を母語とする日本語学習者の「(ラ)レル」の誤用は、誤用例の数から見ると、「過剰」、「欠如」のパターンで起りやすく、また、意味から見ると、「状態・様態描写」を表す非情物主語の受身文の割合がかなり高いことが分かる。以下では、「過剰」のパターンの例について、具体的な誤用の実態とその原因を考察していく。

3.2 「(ラ) レル」の「過剰」の誤用に関する考察

受身文の誤用のうち、「(ラ) レル」の「過剰」のパターンの誤用について、例数の多い順に受身文の意味分類別の分布を示すと、〈表5〉のようになる。

〈表5〉「(ラ) レル」の「過剰」の誤用の意味分類別分布

受身文の意味分類	被動作主 (対象)	動作主 (能動主体)	誤用例数		
状態・様態描写	非情	有情	240	278	73.0%
	非情	非情	38		
単純動作描写	有情	有情	43	49	12.9%
	有情	非情	6		
受益・恩恵	有情	有情	11	31	8.1%
	有情	非情	20		
創作・創造	非情	有情	11	11	2.9%
不利益・被害	有情	有情	3	9	2.4%
	有情	非情	6		
物理的状态変化	非情	有情	1	2	0.5%
	非情	非情	1		
迷惑	有情	有情	1	1	0.3%
合計：			381		100%

また、受身文における「(ラ) レル」の「過剰」の誤用に対して、添削でどのように訂正されているか、すなわち誤用に対して正用として示されている動詞を自他の区別から分類すると、〈表6〉のようになる。

〈表6〉「(ラ) レル」の「過剰」の正用の分布

正用	例数	
他動詞文	197	51.7%
自動詞文	173	45.4%
その他	11	2.9%
合計：	381	100%

〈表5〉から、「(ラ) レル」の「過剰」の誤用は、「状態・様態描写」を表す非情物主語の受身文に最も多く見られることが分かる。また、〈表6〉のように、「(ラ) レル」の「過剰」は主に他動詞文や自動詞文に訂正されている。このため、以下では、正用が他動詞文の場合と自動詞文の場合の順に、「過剰」の誤用例を挙げながら、「(ラ) レル」の誤用を考察していく。

3.2.1 正用が他動詞文の場合

「(ラ) レル」の「過剰」の正用が他動詞文の誤用として、次のような例が挙げられる。

- (1) 修論 (0058) / 学習歴 6 年か 6 年以上 :
つまり寺村の〈指摘され→指摘し〉た動詞は、普通中相動詞と言われている。
- (2) 作文 (0085) / 学習歴 1 年半 :
クラスメートは「玉城さんは本当に優しい人だ」とよく〈言われている→言う〉。
- (3) 作文 (0677) / 学習歴 2 年 :
誰が何を〈言われても→言っても〉聞きません。
- (4) 作文 (0058) / 学習歴 2 年半 :
それ以外に、チベット族の人々も私に深い印象を与え〈られ→〇〉た。
- (5) 作文 (0057) / 学習歴 1 年半 :
日本人は心をこめてすばらしいアニメを〈作られる→作っている〉。
- (6) 修論 (0052) / 学習歴 6 年か 6 年以上 :
青木京子までの研究では、部分的に一、二の作品を取り上げ、〈考察され→考察し〉ただけで、その女性像は明らかに浮かび上がってきたとは言えなかった。
- (7) 作文 (025) / 学習歴 1 年半 :
今さら、人々は公害問題を重要視〈される→する〉ようになった。
- (8) 作文 (0057) / 学習歴 1 年半 :
物語と背景から、非常に不思議な忍者の世界を〈作られる→作っている〉。
- (9) 感想文 (0164) / 学習歴 4 年 :
スピードや量を重視〈される→する〉生活の中で、じっくり物事を考え、書いていく心を失っている。

例 (1) ~ (9) のうち、例 (1) ~ (7) では、下線で示したように、「(ラ) レル」の過剰使用により生じる「受身文」の動作主 (正用の能動文における能動主体) が出現している。一方、例 (8)、(9) には、動作主が出現していない。

このような動作主の出現状況にかかわらず、すべての誤用例に共通している問題点は、例 (1) ~ (9) のように、構文上は能動文であるのに、「(ラ) レル」を使っている点である。つまり、名詞側は能動文の格表示 (例えば「ガ, ヲ」) となっているのに対して、動詞側に受身の「(ラ) レル」が付加されているため、「(ラ) レル」が「過剰」と判定されている。このように、学習者の誤用では、文のタイプと「(ラ) レル」の有無という動詞の形態的タイプとがねじれている⁶⁾と考えられる。

次に、誤用が見られた具体的な動詞の意味タイプを見る。志波 (2015:15-25) で挙げられている動詞の分類を参考にし、誤用例における動詞の意味タイプを分類した (以下でも同様)。意味タイプの上位 5 位までをリストの形で示すと、〈表 7〉のようになる。

〈表7〉 誤用例における動詞のタイプ（正用が他動詞の場合）

動詞のタイプ	動詞				延べ例数		
	和語動詞	例数	漢語動詞	例数	和語動詞	漢語動詞	合計
言語活動	言う	15	指摘する	9	28	15	43
	呼ぶ	4	回答する	1			
	教わる	3	記載する	1			
	述べる	2	教育する	1			
	表す	1	説明する	1			
	描き出す	1	表記する	1			
	書く	1	論述する	1			
	訳す	1					
授受	与える	6	盗作する	1	13	1	14
	受ける	5					
	奪う	1					
	賜わる	1					
生産	作る	5	設計する	3	9	5	14
	書く	3	偽装する	1			
	生み出す	1	執筆する	1			
思考	思い出す	5	観察する	1	7	7	14
	思う	1	感知する	1			
	調べる	1	強調する	1			
			考察する	1			
			推計する	1			
			認識する	1			
			分類する	1			
感情評価的態度	癒す	1	尊敬する	2	4	5	9
	信じる	1	謳歌する	1			
	好く	1	重視する	1			
	誇る	1	重要視する	1			
その他					86	17	103
			合計 :		147	50	197

〈表7〉で示したように、「言語活動」、「授受」、「生産」、「思考」、「感情評価的態度」を表す動詞に学習者の誤用例が多い。

まず、最も多い「言語活動」の誤用例は、「言う」、「指摘する」などに多く見られるが、著名な人物に対する敬意を表すための、尊敬の「(ラ)レル」との混用の可能性がある。例(1)や次の例(10)のように、人物名(作家など)が入っている例は計10例ある。

(10) 修論 (0048) / 学習歴 6 年か 6 年以上 :

そうすることに心苦しき・申しわけなきを感じる意で用いられることに理由を求めることができると、小池氏は〈指摘された→指摘した〉。

これ以外の「言語活動」の「(ラ)レル」の過剰使用には、項と項の間の意味関係が関わっていると考えられる。金 (2012) は、「私は先生に (欠席) を指摘された」、「私はお母さんに (牛乳をとってきて) と言われた」のような例を挙げ、言語活動を伴う事柄を表す動詞の、有情物主語の受身文で、主語に立っている人は、「述語動詞によって表現される動作が向かっていく相手または対象で、全体の事柄を能動文で表す場合、ニ格またはヲ格をとって文の中に登場しようという点で、すでに構文的な関わりを持っているといえる」と指摘している (同: 56)。学習者の誤用例 (2) ~ (3) を見ると、「クラスメートは「玉城さんは本当に優しい人だ」と言われる」、「誰が何を言われる」のように、本来の「発話者」(動作主) が「発話の対象」(被動作主) として描かれている。すなわち、能動文で間接目的語に立つ「発話の対象」である「玉城さん」等が受身文の主語に繰り上げられていない。これは、「発話の対象」と「発話者」との関係をうまく把握できないことによって、「(ラ)レル」を「過剰」使用している例だと捉えることができる。

「授受」の例についても同様に考えられる。学習者の誤用例 (4) を見ると、「チベット族の人々が私に深い印象を与えられる」のように、「与え手」(動作主) と「受け取り手」(被動作主) が逆になっている。能動文で間接目的語に立つ「受け取り手」である「私」が、受身文の主語となる必要がある。これは「受け取り手」と「与え手」との関係をうまく把握できないことによって生じている誤用と考えられる。

このように、「言語活動」と「授受」の動詞は、能動文でも受身文でも「ガ、ニ、ヲ/ト」文型を取る 3 項動詞であるが、能動文のニ格名詞句が受身文でガ格主語にならない誤用が多く見られる⁷⁾。

一方、例 (5) ~ (9) のような「生産」、「思考」、「感情評価的態度」の動詞が用いられている誤用例と、その他のタイプの誤用例では、結果目的語のヲ格名詞句が文中に表れている例が多い (「アニメ」、「公害問題」など)。このような誤用の添削は、格体制はそのままで動詞側を能動形にするか、「(ラ)レル」はそのままで受身文の格体制を修正するか (「ガ、ヲ」を「ニ/ニヨッテ、ガ」に直す) のどちらでも成り立つが、添削者はおそらく前後の文脈を考慮したうえで、「(ラ)レル」が過剰であるという訂正を行っている。王辰寧 (2016) では、受身文における「ヲ」「ニ」の誤用について調査・分析し、その結果、受身文におけるヴォイスに関わる誤用では、「ヲ→ガ」パターン⁸⁾に、能動文の目的語がヲ格のまま残ってしまっている例が多いことを明らかにした。例 (5) ~ (9) のような誤用もまさにこれとは同質な誤用と考えられ、直接受身文で格の交替が必須であることへの理解が不十分であることが誤用の一つの原因だと考えられる⁹⁾。

3.2.2 正用が自動詞文の場合

正用が自動詞文の場合には、学習言語への理解の不十分さから生じていると考えられる誤用と母語の負の転移に疑われる誤用がある。以下、それぞれ検討していく。

3.2.2.1 他動詞の受身文と自動詞文の選択にかかわる誤用

日本語記述文法研究会（2009:235）によると、「直接受身文の重要な特徴の1つは、対応する能動文の主語を背景化する働きである。（中略）したがって、直接受身文と能動文を比べると、直接受身文では文中に表現される名詞の数が1つ減り、結果的に自動詞文と似た文型をとる場合がある」とされる。例えば、次のような例が挙げられる。

- (11) 他動詞文： 大企業が駅前に大きなビルを建てた。 (同:235)
 (12) 直接受身文： 駅前に大きなビルが建てられた。 (同上)
 (13) 自動詞文： 駅前に大きなビルが建った。 (同:236)

このように、他動詞文に比べて項が1つ少ないという点で、例(12)のような他動詞の直接受身文と例(13)のような自動詞文は形が類似しうる。しかし、両者は、特定する必要がない動作主（他動詞文の主語）「大企業」が背景化されているか（直接受身文）、動作主がもともと描写されておらず「ビル」の出現を表しているか（自動詞文）という点で異なっている。

実際の学習者の誤用例でも、例(14)のような、他動詞の直接受身文と自動詞文の選択で迷っていると考えられる例（計37例）が見られる。

- (14) 作文 (12) / 学習歴 2 年半：
 集団の特徴は集団に溶け込むことに日本人の性格が〈表されている→表れている〉。

例(14)は、非情物（「日本人の性格」）の表出を、非情物主語の状態・様態として描写する直接受身文によって表そうとした誤用であり、誤用の結果、あたかも動作主の存在が含意されているように見えてしまっている。しかし、例(14)のような文では、動詞にかかわる項が非情物である主語（「日本人の性格」）しかなく、他動詞の直接受身文ではなく自動詞文を使うのが妥当だと判断されている。このように、直接受身文と自動詞文のそれぞれの役割やニュアンスの違いが理解できていないことで、両者の混用が起こっていると考えられる。

3.2.2.2 自動詞から直接受身文を作る誤用

正用が自動詞文の場合には、上の他動詞の受身文と自動詞文の選択にかかわる誤用のほかに、自動詞から直接受身文を作る誤用が目立つ。

- (15) 修論 (0074) / 学習歴 6 年か 6 年以上：
 現在になって、温泉は、日本全国に〈普及され→普及し〉たばかりでなく、その量の多さと多様化で世界においても非常に有名になった。
 (16) 作文 (0074) / 学習歴 1 年半：
 19世紀後半、江戸幕藩体制が〈崩壊され→崩壊し〉、中央集権統一の国家を建設して、日本で資本主義が形成されました。

(17) 修論 (0091) / 学習歴 6 年か 6 年以上 :

現在でも弁天岩、高山岩などの巨石信仰は民間で〈伝われ→伝わ〉ている。

例 (15) ~ (17) は、非情物の動き・変化を、非情物主語の状態・様態として描写する直接受身文で表そうとした誤用である。このような誤用が見られた具体的な動詞を、意味タイプの上位 3 位までリストの形で示すと、〈表 8〉のようになる。

〈表 8〉誤用例における動詞のタイプ (正用が自動詞の場合)

動詞のタイプ	動詞				延べ例数		
	和語動詞	例数	漢語動詞	例数	和語動詞	漢語動詞	合計
出現	/		定着する	9	0	27	27
			普及する	9			
			派生する	6			
			完成する	1			
			実現する	1			
			成立する	1			
変化	替わる	1	拡張する	4	6	12	18
	代わる	1	加速する	1			
	変わる	1	希薄化する	1			
	倒れる	1	多様化する	1			
	なる	1	破壊する	1			
	伸びる	1	発展する	1			
	/		復活する	1			
			崩壊する	1			
			融合する	1			
	言語活動	伝わる	8	/			
その他					36	13	49
合計 :					50	52	102

〈表 8〉のように、誤用が見られた動詞は、対応する他動詞がある有対自動詞 (例: 伝える / 伝わる) と、形態上自他が分かりにくい漢語サ変動詞に集中している。このため、自動詞を他動詞として使う、いわゆる自他の混同が生じている可能性が考えられる。

このような誤用は、特に非情物主語を取る文に集中している。例えば、例 (15) では自動詞 (「普及する」) で非情物 (「温泉」) を描写すべきところを、「普及する」を他動詞として捉え、その「他動詞」から、非情物主語の状態・様態を描写する直接受身文を誤って作ってしまっている。つまり、このような例は、動詞の自他の混同を起点とし、自動詞で表現できる内容を、他動詞と捉えた自動詞から作った受身文によって表現しようとすることによって生じたと考えられる。

3.2.2.3 母語の負の転移による誤用

次に、以下のような誤用例は、ここまで検討した学習言語への理解の不十分さという要因だけではなく、母語の負の転移という要因も考えうる例である。

(18) 作文 (0049) / 学習歴 1 年半 :

私は〈感動された→感動した〉。

(19) 作文 (002) / 学習歴 1 年半 :

大部分の人は、ゴミを気ままに捨てて、廃気と汚れ〈られ→〇〉た水を処理せず排出して、それに草花と森を自分の意思で破壊する。

(20) 作文 (019) / 学習歴 1 年半 :

現在、社会的経済や科学技術の発展がますます向上〈されている→する〉とともに、いろいろな公害問題が生じています。

(21) 修論 (0079) / 学習歴 6 年か 6 年以上 :

地は〈水没された→水没していた〉からである。

例 (18) ~ (21) の「感動する」、「水没する」などの例では、自動詞をそのまま使うべきところで、「(ラ)レル」を「過剰」に使い、「自動詞+(ラ)レル」の形になっている。このタイプの誤用の原因は、学習者の母語である中国語において、これらの動詞の受身形が認められていることにあると考えられる。このような誤用が疑われる具体的な動詞をリストの形で示すと、〈表 9〉のようになる。

〈表 9〉母語の負の転移による誤用例における動詞のタイプ

動詞のタイプ	動詞				延べ例数		
	和語動詞	例数	漢語動詞	例数	和語動詞	漢語動詞	合計
心理的態度	苦しむ	1	感動する	22	1	24	25
			感心する	1			
			心配する	1			
変化	汚れる	2	向上する	1	4	1	5
	育つ	1					
	絶える	1					
位置変化			水没する	1	0	1	1
合計 :					5	26	31

〈表 9〉から、まず、漢語サ変動詞の誤用が多いと言える。特に「感動する」の誤用が多く見られる。22例中18例の文体が「作文」となっており、学習者の感想や感情を表現する作文で頻出する語とも考えられる。

次に、動詞のタイプからは、これらの動詞に意味的な共通性を見出すことができる。第一に、「感動する／感心する」のような人の心理を表す動詞、第二に、「汚れる／向上する」のような物や事態の状態変化、あるいは「水没する」のような物の位置変化を表す動詞である。これらの動詞を含む文

が中国語と日本語でどのような構文を形成するのかについて、以下の例(22)～(25)に『中日対訳コーパス第一版』に収録されている中国語の小説、政論、伝記の例(中国語原文/日本語訳文)を示す。

- (22) 老人 深深 被感动 了。 / じいさんは心から感動した。 『青春之歌/青春の歌』
- (23) 小姑娘 小鼻子 小眼 长得挺秀气, 脸 被抹脏 了, 头发上挂着碎黄蒿。 / 女の子の小さな目と鼻はとても可愛らしく整っているが、顔は涙と土で汚れ、髪にはヨモギのくずがついていた。 『插队的故事/遥かなる大地』
- (24) 城乡 人民 文化生活 进一步 丰富, 生活质量 得到提高, 正在向小康目标前进。 / 都市・農村人民の文化面の生活はより豊かなものとなり、生活も質的に向上し、目下、まずまずの生活水準という目標に向かって前進している。 『人大報告96/全人大報告(96)』
- (25) 当父亲和母亲两个人一起前去查看时, 发现那里都 被水淹 了。 / ところが、父と母が二人で墓を調べにいとってみると、すっかり水没していることがわかった。 『我的父亲邓小平/わが父・鄧小平(1)』

このように、中国語の例では、“(被)感动”、“(被)抹脏”、“(得到)提高”、“(被)淹”のように、いずれも「(中国語の受身のマーカー¹⁰⁾ + 自動詞¹¹⁾」の構造をとる構文になっている。一方、これに対応する日本語の構文では、「感動する」、「汚れる」、「向上する」、「水没する」のように、自動詞が使われている。

ここで示した動詞群における「(ラ)レル」の「過剰」の誤用は、学習者の母語(中国語)では受身の要素が使われるため、母語の感覚のまま、「(ラ)レル」を過剰に使ってしまうことで起こると考えられる。これは、学習者の母語である中国語の規則が負の転移を起こしていると解釈できる。

4. おわりに

本稿では、『YUKタグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス2015』Ver. 5を用いて、中国語を母語とする日本語学習者の受身文における「(ラ)レル」の誤用を調査・分析し、以下のことを明らかにした。

- ① 中国語を母語とする日本語学習者の「(ラ)レル」の誤用には、「欠如」、「過剰」、「混同」、「その他」という四つのパターンがある。
- ② 誤用例の数から見ると、「(ラ)レル」の誤用は、「過剰」、「欠如」のパターンで起こりやすい。また、受身文の意味分類で見た場合、「状態・様態描写」の意味を表す受身文の誤用が多い。
- ③ 「過剰」の誤用は、主に他動詞文か自動詞文に訂正されている。正用が他動詞文の場合、「言語活動」や「授受」の動詞のような3項動詞の項と項の間の関係をうまく把握できていない、あるいはヲ格結果目的語が表れている直接受身文で格の交替が必須であることへの理解ができていないといった、学習言語への不十分な理解が誤用の原因だと考えられる。これに対して正用が自動詞文の場合、他動詞の受身文と自動詞文の選択や、動詞の自他の区別が理解できていないことに起因する誤用のほか、母語の負の転移(干渉)にかかわる誤用が見られる。

本稿で明らかにした誤用の実態からも示しているように、中国語を母語とする日本語学習者にとって特に非情物主語を取る受身文の産出が難しい。このため、受身文の表している意味や述語動詞の意味タイプに配慮した非情物主語の受身文の指導の工夫が必要であると考えられる。

本稿では「欠如」、「混同」といった誤用のパターンについて扱うことができなかったが、今後はこれらの誤用も詳しく分析していく必要がある。

注

- 1) 例文は、北京日本学研究中心（2003）『中日対訳コーパス第一版（CD-R1）』の実例をもとに筆者が作成したものである。すべて日本語母語話者による添削済みである。
- 2) 受身文における「ヲ→Y」型誤用（他の助詞を使用すべきなのに、「ヲ」を使用してしまったケース）、「ニ→Y」型誤用（他の助詞を使用すべきなのに、「ニ」を使用してしまったケース）についての調査・分析は、王辰寧（2016）で行った。
- 3) 例えば、作文コーパスにおける例：

心〈研究タグ格助詞／が → 誤用タグを〉〈研究タグ動詞／こもって→こめて〉私に話して〈研究タグ不使用／授受／○→くれて〉、
 すごく〈過剰使用／受身／感動された→感動した〉。 （作文（0062））

を、便宜上、次のように修正した。

心をこめて私に話してくれて、すごく〈過剰使用／受身／感動された→感動した〉。
- 4) 1. 2節で言及した王忻（2008）では、受身文における「(ラ)レル」の誤用は「過剰」、「不足」、「態の混同」の三つのケースに見られたことが指摘されているが、本稿では、この分類を参考にしながら、受身文の「(ラ)レル」の誤用のパターンを四つにまとめた。
- 5) 例文には、「文体（ファイル番号）／学習歴」の形で情報を付した。情報が欠落している場合は、「φ」で示している。また、「(ラ)レル」の誤用箇所の研究タグは省略している。
- 6) 「欠如」のパターンでも、同じ性質の誤用、つまり名詞側は受身文の格表示となっているのに対して、動詞側で受身の「(ラ)レル」が脱落している例が多く見られた。
- 7) なお、このような誤用には、3項動詞の二格名詞句相当の名詞句が主語となる受身文が学習者の母語である中国語に存在しないことが関係する可能性もある。例えば、中国語では、“bèi zàngzúrén liúxià shēnkè yīnxiàng被 藏族人 留下 深刻 印象”（私はチベット族の人々に深い印象を与えられた）というような受身文は成立しない。これについての詳しい検討は、今後の課題としたい。
- 8) 「ガ」を使用すべきなのに、「ヲ」を使用してしまっているケースを指す。
- 9) 本節で分析した誤用例に関して、学習者は受身文として使用している意識がない、つまり、受身形と能動形を混同している可能性もあるが、この可能性の分析、ならびに誤用が見られたこれらの他動詞が受身文に比較的に使われやすい理由の分析は、今後の課題としたい。
- 10) 中国語の受身文は、一般的には“被”にマークされている。なお、中島（2007:76）によると、中国語では“受”、“挨”、“得”、“帶”、“招”、“惹”等の動詞を用いて受身の意を表すこともできる。
- 11) これらの動詞は中国語では自動詞扱いで、典型的な他動詞ではない。しかし、「把+目的語+動詞」の形を取る構文において、“把”の後ろの目的語（動作の受け手）に対して働きかけるような意味的な他動詞だと考えることもできる。

言語資料

- 于康 (2015) 『YUKタグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス2015』 Ver.5
北京日本学研究中心 (2003) 『中日対訳コーパス第一版 (CD-R1)』

参考文献

- 市川保子 (1997) 『日本語誤用例文小辞典』、凡人社
影山太郎 (2006) 「日本語受身文の統語構造—モジュール形態論からのアプローチ」『レキシコンフォーラムNo.2』、pp.179-231、ひつじ書房
金俸呈 (2012) 「言語活動を伴う事柄を表す動詞の人主語受身文について—主語と補語との意味的な関連性という観点から—」『東京外国語大学日本研究教育年報』16、pp.45-58、東京外国語大学日本課程
志波彩子 (2015) 『現代日本語の受身構文タイプとテキストジャンル』、和泉書院
中島悦子 (2007) 『日中対照研究ヴォイス—自・他の対応・受身・使役・可能・自発—』、おうふう
日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法2—第3部 格と構文・第4部 ヴォイス—』、くろしお出版
馮富栄 (1993) 「日本語受動文の学習過程における母語—中国語の影響について—」『教育心理学研究』41-4、pp.388-398、日本教育心理学会
益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説—』、くろしお出版
望月圭子 (2009) 「中国語を母語とする上級日本語学習者によるヴォイスの誤用分析—中国語との対照から—」『東京外国語大学論集』78、pp.85-106、東京外国語大学
王忻 (2008) 『中国日语学习者偏誤分析 (新版)』、外语教学与研究出版社
王辰寧 (2016) 「中国語を母語とする日本語学習者の格助詞「ヲ」「ニ」の誤用について—受身文と使役文における誤用の分析—」『日语偏誤与日语教学研究』1、pp.67-80、浙江工商大学出版社

An Analysis of the Errors in Passive Sentences of Chinese Native Speakers Studying Japanese: Data from the Essay Corpus

Wang Chenning

This paper investigates the errors in Japanese passive sentences produced by Chinese native speakers studying Japanese, using the 'YUK corpus of Japanese essays by Chinese native speakers studying Japanese with tags 2015' Ver.5. In particular, this research focuses on errors involving the passive marker '- (r)*are-ru*'. Analysed are 1) the number of errors, 2) the patterns of errors and, 3) the causes of the errors.

The results from the survey and analysis are as follows. A) the 4 patterns of learners' errors can be described as 'deficiency', 'overuse', 'mixed with other expressions' and 'the other errors'. B) the most common error category is that of 'overuse' and 'deficiency'. C) the reason for the error of 'overuse' is that of insufficient comprehension of the Japanese passive construction and interference from the learners' native language(Chinese).